

島根県立石見美術館

研究紀要

第5号

2011

目次

医光寺調査報告（彫刻）	椋木 賢治	1
資料紹介 石橋和訓畫伯小伝	二	真住 貴子	25
齋藤信治と産業工芸振興政策	河野 克彦	43
↳ 国立工芸指導所での活動を中心に		

医光寺調査報告（彫刻）

椋木賢治

医光寺は島根県益田市染羽町に所在する。臨済宗東福寺派。山号は瀧藏山。貞治二年（一二三六三）、斎藤長者妻直山妙超を開基、龍門土源を開山として創建されたと伝える崇観寺を前身とする^①。

史料では、天授六年（一三八〇）臨済宗聖一派下の十刹甲刹五十二か寺を定めたとする『甲刹記』に崇観寺の寺号や開山名が見えるのが古例である^②。これに次いで永徳三年（一三八三）「益田祥兼置文条々」がある。これは石見国益田を拠点とした在地領主・益田兼見（法号祥兼）が三人の子息への所領譲渡にあたって守るべき心得を定めたものである。このなかに領内に所在する寺社について記した箇所があり、その筆頭に崇観寺が挙げられている^③。これによれば、崇観寺は益田兼見の申し成しによって諸山に列した官寺であること、益田家として最も賞翫すべき寺であること、東福寺莊嚴藏院の末寺であること、開山の塔頭は熙春庵と称することが確認できる。また同書は医光寺の史料上の初見であるが、ここでは崇観寺との関係はことさらに記されず、山寺・高崎・得原と並ぶ領内の小庵の一つとして位置づけられている。

崇観寺創建の事情については史料がなく不明瞭ではあるが、中世、石見地域で強い勢力を有した益田氏がその確固たる基盤を形成した南北朝期、当寺がその最も賞翫されるべき寺として諸山の格を得た

ことは、この地域の歴史における一つの重点として特筆されよう。しかし現在においては、この時期の崇観寺に関する史料は乏しいために、その具体的な様相を知ることが困難となっている。

一方、現在の医光寺は、雪舟等楊による築庭と伝える庭園が国の史跡及び名勝に指定されており、雪舟の足跡を慕う内外の参拝者が四季を通じて訪れ賑わっている。そうしたなか、伝来する文化財についてはこれまで十分な調査が行われておらず、知られるところが意外に少ないのが実状であった。このたび好機を得て、彫刻を中心とする当寺の文化財調査を実施したところ、まさに益田兼見の時代、南北朝期に遡ると目される作品数例を見出すことができた。本稿はその調査によって得られた知見を報告するものである^④。

1. 薬師如来坐像

概要

木造 漆箔 一軀 像高七六・七cm

形状

肉髻、螺髮(旋毛形・左旋)を彫出。肉髻珠、白毫をあらわす。玉眼嵌入。耳朵環状。三道彫出。覆肩衣と衲衣を着ける。衲衣は左肩を覆い右肩に少し懸かる。左脇辺りに特徴的なC字形の折り返しをつける。衣文は強く立ち上がり、C字形に呼应するような屈曲を所々に設ける。右手は屈臂、全指を伸ばして掌を前に向ける。左手は膝上に置き、掌を仰いで薬壺を載せる。左足を外に結跏趺坐する。

法量 (cm)

像 高	七六・七 (二尺五寸三分)		
髮際高	六六・四 (二尺一寸九分)		
頂上顎	二七・四	面 長	一七・九
面 幅	一五・六	耳 張	二〇・二
面 奥	一五・六	胸 奥	左二三・六
腹 奥	二八・四	肘 張	五二・九
膝 張	六二・八	膝 奥	四四・四
膝 高	左一二・八	膝 高	右一二・八

品質構造

針葉樹材(檜か)。寄木造。漆箔。玉眼嵌入。

底面を盖板で塞ぐため構造の詳細は不明。以下、表面からの観察による。頭体幹部は前後二材の間に厚約3cmの襠材を挟み、内割りして三道下で割首する。襟足から下の首部が後補のため、頭後部材が体部と同材かは不明。両体側部各一材。両脚部は横一材。裳先一

材。右の肘から先は前膊と手首先を別につくり、袖口の位置で短く。左前膊は一材を脚部の上に置き、手首先一材を挿し込む。薬壺一材。頭前部は幅二〇cm×奥一四cm、両脚部は奥一六cm×高一三cm程度の木口の材を用いる。

肉髻珠、白毫、玉眼、以上水晶製。

表面は頭髪を除いて漆箔。下地に布を貼る。頭髪部は紺青色に彩色。着衣の文様は截金であらわされる。眉、口髭は墨描。像底の蓋板は黒漆塗り。板柄の痕跡がある。

伝 来

一、現在は医光寺本尊として本堂に安置されている。
二、次のとおり修理銘を記した木札が付属しており、本像は医光寺本尊として、元禄十二年(一六九九)に法橋光益によって修復されたことがわかる。なお現在も本像の脇侍として安置されている日光菩薩立像・月光菩薩立像はこの時の新造であることも知られる。

【木札(表)】

原支石州美濃郡益田庄瀧蔵山醫光禪寺本尊

薬師如来彫刻之来由者則當山開基祖那齊藤長者

之妻室法名直山妙超大姉之創建而星霜深遠之

依之尊像甚及破壊訖當テ此□不加修補者永□

壞滅独□十方勸門丐万人之奉加講衆頓□□而非

□修復於本尊而已并脇士二大尊共新奉造立

【木札(裏)】

以備後昆者巴願以此功德普及於一切我等与万人講衆皆共成佛道矣

于時元禄十二龍集卯巳 現住 月叟長白願主敬白

臈月佛成道日 化縁キ子 玉澗祖珍沙門

本尊者安阿弥作之 大佛師京寺町 法橋光益謹作

脇立二尊光益作之 下御霊前

保存状態

左手第二・三指先、底部板柄欠失。玉眼、白毫、肉髻珠、右手先、

左手先、薬壺、漆箔、彩色、以上後補。

制作年代

南北朝時代 十四世紀

備考

ブロック状の構成を見せる体軀の造形や、装飾的な屈曲を多用する衣文表現の特徴から、南北朝時代に官寺の造像等で中心的な役割を果たした院派仏師による制作と考えられる。特に端正な面相、バランスの良い体軀、充分な奥行き、強く立ち上がる衣褶の整理された表現など、出来映えは優れて良質であり、院派における造像の強い規範となった院広の確立したスタイルを正統に受け継いでいる。

栃木・興禅寺の釈迦如来坐像(二三三二年、院吉・院広・院遵作)に類する、造形に破綻がなく典雅さを備えた作風はまさしく十四世

紀半ばの院派正系仏師が到達した水準に達している。しかしながら、脚部の造形に顕著なように身体表現に形式的なところがあがり、また着衣の造形にも硬直的なところが認められることから、制作年代はこれにやや遅れる時期と考えられる。

2. 釈迦如来坐像

概要

木造 漆箔 一軀 像高七〇・七cm

形状

頭髪は毛筋を彫る。頭髪を束ねて頭頂で宝髻(亡失)を結う。天冠台を彫出。天冠台は紐一条・連珠・紐一条、一周六弧で構成され、左右にそれぞれ花文をほどこす。頭髪を前方二箇所と左右の各花文で絡めて天冠台を留める。髻髪各一条が両耳を渡る。白毫をあらわす。玉眼亡失。耳朶環状。三道彫出。衲衣は左肩を覆い右肩に少し懸かる。覆肩衣を着ける。両手は膝上に掌を仰いで重ね置く。右脚を外にして結跏趺坐する。

法量 (cm)

像高 七〇・七 (二尺三寸四分) (現状)

髮際高 六四・五 (二尺一寸三分)

頂一顎 二五・四 面長 一八・三

面幅	一四・五	耳張	一九・四
面奥	一四・五	胸奥	右二三・五
腹奥	二四・五	肘張	五二・二
膝張	六〇・二	膝奥	四四・八
膝高	左一三・一	膝高	右一二・八

品質構造

針葉樹材(檜か)。寄木造。漆箔。玉眼嵌入(亡失)。

体幹部は前後二材の間に約七mmの襜材を挟み、内割りする。両体側部各一材。両脚部横一材。頭前部別材。頭後部は体幹後部と同じ材から割り短ぐ。頭前部材の高さを合わせるための板状部材が体部との間にかまされる(亡失)。両手首先は一材からなる。左前膊部一材。右前膊部一材(亡失)。体幹部材は体内の腰部辺りで左右各二本の柄状突起を彫り残し、前後を結着する。体前部材の前側下部に断面が半円形の像心束を彫り残す。

表面は頭髪を除いて漆箔。頭髪部は彩色。髭は墨描。口唇朱彩。白毫は水晶製。

伝来

- 一、現在は医光寺開山堂に安置されている。
- 二、像内に次の銘記があり、応安四年(一三七一)に大仏師法橋広成により、崇観寺本尊像として造立されたことがわかる。

【内割背部 墨書】

奉造立

石州崇観寺佛殿本尊 伏願

皇風永扇帝道遐昌佛日增輝法輪常轉伽藍土地護法護人十方

檀那增福增慧三災八難遠托佉方百吉千祥□皆駢集上報

四恩下資三有法界群生同圓種智

應安四年癸巳臘月十五日

大佛師 法橋廣成

大檀那 越妙兼見

大願主 祖峰士禪

住持 威山長雄

【内割後頭部 墨書】

□□其之□□□作

素□

沙門祥真作

保存状態

髻、宝冠、玉眼、右前膊部、裳先、胸部襜材、以上亡失。白毫、左眼部周辺、両手先、漆箔、彩色、以上後補。

制作年代

南北朝時代 応安四年(一三七一)

備考

制作者である法橋広成については他に史料がなく明らかでないが、造形的にこなれない作風は在地の仏師による制作を思わせる。像心束や前後束をもつ構造や、独特の衣文表現など、当時の主流を占めた院派仏師の造形に倣うことは明白であり、地方における造像のありようの一面を見せて興味深い。

頭部内割の墨書から頭部の制作は沙門祥真がおこなったようにも読めるが、これについては判断を保留したい。また本像銘文により、南北朝時代の在地領主・益田氏による仏教振興の具体的な様相が分かることは、地域史の実像に新たな光を当てることにもなる。現在の医光寺の前身・崇観寺は、史料の制約によりその実像が明らかでないが、本像はその崇観寺の本尊像であることが明確な貴重な存在である。なお、本像銘記が崇観寺に関する史料では現存最古のものとなる。

3. 薬師如来坐像

概要

木造 漆箔 一躯 像高三八・七cm

形状

本体

肉髻、螺髪（旋毛形・右旋）を彫出。髪際波形。肉髻珠、白毫、

玉眼を亡失。耳朶環状。三道彫出。覆肩衣と衲衣を着ける。衲衣は左肩を覆い右肩に少し懸かる。左脇辺りに特徴的なC字形の折り返しをつける。衣文は稜線によってあらわされ、C字形に呼应するような屈曲を所々に設ける。右手は屈臂して掌を前に向ける。左手は膝上に置き、掌を仰いで薬壺を載せる。左足を外に結跏趺坐する。

光背

二重円光。頭光は内区に八葉蓮華（地を透かす）、外区は内側から紐一条、圈帯、紐一条、連珠、紐一条、列弁。身光は内区中央を透かし、外側に圈帯（周囲を一段低く縁取る）。外区は内側から紐一条、連珠、紐一条、列弁。光脚に蓮弁を浮き彫りであらわす。周縁部には宝相華唐草文の間に七体の飛天を彫り透かす。

台座 蓮華八重座

蓮肉（円形、周囲を一段高く縁取る）、蓮弁（十方六段魚鱗葺き）、上敷茄子（円形、宝相華輪宝文透かし彫り）、華盤（八葉形、受板付き）、下敷茄子（円形、宝相華文透かし彫り、下方に蕊を付す）、受け座（蔓草文透かし彫り）、華盤（下方に蕊を付す）、反花（八方二段）、框座（新補）からなる。

法量（cm）

本体

像高 三八・七（一尺二寸八分）

髪際高 三三・九（一尺一寸二分）

頂ノ顎	一三・六	面長	九・四
面幅	八・二	耳張	九・八
面奥	一一・二	胸奥	一一・〇
腹奥	一二・四	肘張	二七・四
膝張	三一・八	膝奥	二一・三
膝高	左七・一	膝高	右七・二

光背

総高	五六・八(現状)
最大幅	四四・九(現状)
頭光張	一八・四 光脚張 二九・三

台座

総高	三九・二
最大幅	三九・一(上華盤)
蓮華張	三五・五(最上部)
蓮肉張	三三・三

品質構造

針葉樹材(檜か)。寄木造。漆箔・彩色。玉眼嵌入(亡失)。

頭体幹部は耳後ろを通る線で前後に二材を矧ぎ、内割りをほどこした後に割首する。両肩以下両体側部各一材。左体側部下部に三角状の後補材。裳先を含む両脚部横一材(裳先欠失)。左手首先一材。左前膊一材。右手は袖口から手首まで一材と手首先一材からなる。

右前膊部一材。薬壺一材。

体幹前部材は前側に像心束を彫り残す。体幹部は前後の材から腰部辺りに左右に二本の柄状突起を彫り残し、前後を結着する(現状では先端部欠失)。

表面は肉身部金泥、頭部彩色、着衣部漆箔。着衣部は下地に布を貼る。着衣には地文に卍繫文を截金であらわし、圈帯内は地文に麻葉繫文を截金で、主文に宝相華文を盛り上げであらわす。口唇朱彩。眉・口髭は墨描。

像内は黒漆塗り。矧目には布を貼り、黒漆を塗る。地付から上二・五cm程度までは黒漆が塗られておらず、この位置で像底板を貼っていたものとみられる。

根幹材は幅一二・五cm×奥七・五cm、体側材は横七・五cm×奥一二・五cm、膝前材は奥一〇・五cm×高六・五cm程度の木口材を用いている。

なお光背・台座の大略も古様を示しており、本体と同時期に制作された可能性がある。

伝来

一、現在は医光寺開山堂に安置されている。
二、像内に延宝元年(一六七三)修理の朱書銘があり、かつては勝達寺に安置されていたものと推察される。

【内割膝部 朱書】

奉再興

薬師

如来

延宝元年

癸丑八月吉日

勝達寺住

良尊

【内割腰部 朱書】

天

保存状態

玉眼、白毫、肉髻珠、右手第二・三・四指先、左手第二・三・四・五指先、衲衣左襟部、裳先、底板、以上欠失。

制作年代

南北朝時代 十四世紀

備考

小像ながらも南北朝時代、十四世紀後半の院派正統の作風を見せる。中四国地方にはこの頃の院派の作例として院什銘のある山口・永興寺（一三六二年、福岡・崇福寺現蔵）、愛媛・宗昌寺（一三六二年）、山口・長福寺（一三七四年、山口・竜文寺現蔵）の像が知られている。また島根県内では本像と同規模で院派の作風を見せる作例が邑南町・西蓮寺に蔵されており、比較検討の必要があろう。

本像が伝来したとみられる勝達寺は、医光寺に近接する天石勝神社別当寺の真言寺院。明治元年（一八六八）の神仏分離令を受けて廃寺となった。勝達寺旧蔵の遺品には木造不動明王坐像（神奈川・極楽寺現蔵）、木造地藏菩薩坐像（島根・遍照寺現蔵）、絹本着色釈迦三尊十六善神像（島根・泉光寺現蔵）が知られる。

4. 弘法大師坐像

概要

木造 古色 一軀 像高五〇・四 cm

形状

円頂。玉眼嵌入。内衣の上に法衣を着け、袈裟をまとう。袈裟は左肘を覆い、背面半ば下を覆い、右脇下から腹前を通って、胸前で背面からの紐と輪を用いて吊る。右手は胸前で五鈷杵を執り、内側に捻って掌側を前方に向ける。左手は腹前に構えて念珠を執る。

法量 (cm)

像高 五〇・四（一尺六寸六分）

頂ノ顎 一六・八

面幅 八・九

面奥 四・九

腹奥 一八・七

耳張 一一・一

胸奥 左一五・一

肘張 三〇・九

膝張 四三・九 膝奥 二九・八
膝高 左八・七 膝高 右八・九

品質構造

針葉樹材(檜か)。寄木造り。古色。玉眼嵌入。

頭体幹部は前後に二材を矧ぎ、内割りして、襟際に沿って頭体を割矧ぐ。割矧いだ胸部の下端に三角形の後補材。両体側部各一材。右前膊部一材。両袖垂下部を含む両脚材は横一材からなり内割りをほどこす。両手首先各一材。五鈷杵二材。内割りの鑿幅二・六cm程度。口唇朱彩。玉眼水晶製。

伝来

- 一、現在は医光寺開山堂に安置されている。
- 二、像内に次の銘記があり、嘉暦二年(一三二七)に造立されたことがわかる。

【内割胸部 墨書】

同年十九日作

刻

嘉暦貳年丁卯

三月十九日

【内割背部 墨書】

比丘

奉造立弘法大師□像一躰

嘉暦貳年丁卯三月六日□之

保存状態

保存状態

玉眼、胸部の一部、五鈷杵、数珠、両手先、彩色、以上後補。

制作年代

鎌倉時代 嘉暦二年(一三二七)

備考

弘法大師像の典型として知られる真如親王様の諸像と比べ、像容の特徴は一線を画している。真如親王様において見られる顎の張る角ばった面相や体格の良い偉丈な体軀は、本像では踏襲されていない。また袈裟が左肩に掛からず、左肘を巻くように着けられていることも特徴的である。

医光寺は臨済宗であることから、本像は真言系寺院から移座されたものと考えられる。近隣の真言寺院では明治期に廃寺となった勝

達寺があり、薬師如来坐像（No.3）も勝達寺旧蔵であることから、本像についてもその可能性を考慮すべきだろう。

5. 伝龍門土源坐像

概要

木造 古色 一躯 総高八二・四cm

形状

僧形。玉眼嵌入。内衣の上に法衣を着ける。袈裟は左肩から背面を覆い、右脇腹から腹前を通って左胸で背面からの紐と輪で吊り、左前膊に懸かって下方に垂れる。両手はそれぞれ膝上に置き、持物（亡失）を握る。曲糸に坐す。

法量（cm）

総高 八二・四（二尺七寸二分）
坐高 五三・六（一尺七寸七分）

品質構造

針葉樹材（檜か）。寄木造。彩色。玉眼嵌入。

頭体幹部は前後二材からなり、間に板状材を前後に二材挟む。各材は内割りして、頭体を襟際で割矧ぐ。体幹部前面は左右に割れる。両側側部は左右各二材。両前膊部は左右各一材。手首先は左右各一

材。両脚部は横一材。衣垂下部一材。袈裟の吊具別材。像底に板を貼った痕跡が認められる。

表面は白色下地をほどこした上に顔料で彩色する。

伝来

現在は医光寺開山堂に安置されている。

保存状態

持物亡失。彩色、曲糸後補。

制作年代

室町時代 十六世紀

備考

像主は医光寺開山、龍門土源と伝える。龍門土源は聖一國師の法孫卍庵士顔に師事した東福寺莊嚴門派の僧。

享保十八年（一七三三）の「医光寺記録」によれば、益田宗兼（一五四四年没）の時代、崇福寺は伽藍退転により、隣接する龍門土源の塔所医光寺に引き継がれ、宗兼を再開基として復興されたという⁵⁾。本像の作風は、この医光寺再興の時期に造立されたと見て矛盾ないものと思われる。

註

(1) 医光寺記録(矢富熊一郎『石見滝蔵山医光寺史』一九六四年)

石州美濃郡益田庄滝蔵山医光寺者、京都五山東福寺末而、貞治二癸卯十一月、齋藤長者妻、法名直山妙超大姉創造、為今至享保十八癸丑、既歷三百七十余星霜。当山前東福龍門土源大和尚、聖一國師法孫已庵士顔嗣法也。

仍初開崇観寺、諸山之其一而、住持職以御朱印台翰、被許容之寺也。益田家為領主之時、寄附寺領五百斛。有故天正中退転伽藍、腐所今在医光寺境内。諸山崇観之虚名而貽耳、医光寺者、崇観寺内而、開山龍門之塔所也。

第二世月堂和尚之後、天正年中、領主益田越中守宗兼公、再開基而、寄附寺領三十六石余、請東輝和尚而、令住持云々。

(2) 甲利記(『東福寺誌』一九三〇年)

龍蔵山崇観寺 石見益田 開山龍門源禪師

聖一
四世

(3) 益田祥兼置文条々(益田家文書七三ノ一)(井上寛司・岡崎三郎『史料集・益田兼見とその時代』一九九四年)

寺社事

一 崇観寺者、祥兼申成諸山烈、殊当家可申賞翫寺也、開山塔頭院首以同前、次崇観寺住持職事、可申談本寺庄嚴蔵院、不帶御教書者、不可請申寺領事、任寄進状不可有依々相違矣。

一 医光寺・山寺・高崎・得原比所 以下領内小庵等、子細同前、不可有退転矣。

(4) 調査は二〇一〇年九月三〇日から十月一日にかけて実施した。参加者は以下のとおり。竹下正博(佐賀県立博物館)、荏開津通彦(山口県立美術館)、椋木賢治(島根県立石見美術館)、河野克彦(同)、廣田理紗(同)。なお、あわせて実施した絵画作品の調査成果については特別展図録『雲谷派 雪舟を継ぐ者たち』(島根県立石見美術館二〇一一年)を参照さ

りたい。

(5) 前掲注(1)

(当館主任学芸員)



1. 薬師如来坐像



2. 釈迦如来坐像



3. 薬師如来坐像



4. 弘法大師坐像



5. 伝龍門士源坐像



1. 薬師如来坐像



以憐後昆志也以此切徒善乃於一切我等方
人講無咎共成佛道矣
于時元祿十二龍基已却
臘月餅成通日
大傳師宗寺町
下御王町
法橋先益謹作

原王石州其濃却益田莊瀧藏山醫光禪寺本
華師製彫刻之來由若則當山廟基祖那亦藤本
之奉室誌之直山依好大師之創建而墨爾深
依之守信也居於地誌亦常以取不而作神古水
塔此社境十勸門方一人之奉如講眾願修三則
本飛渡於奉者守而己兼昭于二大尊若新奉造之



2. 釈迦如来坐像





3. 薬師如来坐像





4. 弘法大師坐像





5. 伝龍門土源坐像